石坂洋次郎集

新潮社

46

日本文學全集 46 石坂洋次郎集

昭和三十五年八月二十日発行
昭和四十一年十月三十日十八刷

著者 石坂洋次郎
編者 亀井勝一郎
発行者 佐藤亮一
印刷者 草刈親雄
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)二二一 振替東京八〇〇

印刷・中央精版印刷株式会社
製本・新栄社製本所
本文用紙・十条製紙株式会社
箱貼・カバ・特殊製紙株式会社
表紙布地・望月株式会社

定価 三三〇円

Printed in Japan ©

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

目次

若い人　五
やなぎ座　五三一
草を刈る娘　五五七
霧の中の少女　五八一
婦人靴　六〇三
注解　六二五
年譜　六二九
解説　亀井勝一郎　六四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

石坂洋次郎集

若い人

上巻

一

間崎が勤めている女学校は米国系のキリスト教会で経営している自由博愛主義標榜のミッションスクールであるが、基金が豊かであることと、創設以来の学長であるミス・ケートの磊落な気象とのお陰で、宗教学校にあり勝ちな偏った冷たい空気もなければ、それが崩れてルーズな下卑た気風に堕することもなく、五百余人の発育盛りの女生徒達は、やはりミス・ケートの考案になる簡素な通学服を短く着込んで、芝生と花壇の多い学園の生活をのび〳〵と楽しんでいるようにみえた。

ミス・ケートは北米モンタナ州の鉱山街ビュートの産、本年五十六歳、長い握柄のついた鼻眼鏡を首に吊し、小丘のように盛り上がった胸の上に籠手を組み合わせたような腕組をつくって、始業前、昼休、放課後の三回、学校の内外を隈なく巡視する外は、大抵学長室に納まって読書や事務に専念している。毎月曜の第一時限に会堂で全校生徒に修身講話をするのが決った御役目で、そのほか、月に一ぺん位の割合で各学年に臨時の時間を設けさせ、思索や読書や――規律正しい日常生活の間に蓄積された感想を、美しい流暢な言葉で生徒の胸に伝達する。間崎も一度自分の受持っている四年B組の臨時授業を参観させてもらった事があるが、信念の是非は別問題として、話したい内心の要求があって教壇に立つのだから、熱意のこもった立派な修身授業であった。人を威圧する風貌、一抹の暗影も無い健康な精神、それらに適度な潤いを与える深い教養、これがやわらかい感受性をもつ生徒達をひきつけ、有形無形に学校の気風をつくり上げて行く大きな

底力となっていることは、無神論者の間崎といえど日頃敬服している所であった。

ミス・ケートの訓育方針は「少ない規則を確実に守らせる」ということで、すなわち、時間、服装、宗教上の儀式、この三項目については特に厳格な取締りを設けてその徹底を期し、従って生徒も小気味いゝ程それらの訓練を経ていたが、その一方、学校維持費の大半を外国から仰いでいる強みがあるので、監督官庁から時々指図される訓育施設に関する告達は大抵握り潰しにして、生徒に自由な空気を呼吸させるように計っていた。

部下の職員に要求する所も、教授法や学級管理法等の形式ばった項目は口にも上せず、徹頭徹尾、生徒を個別に理解せよという事に重点を置き、彼女自身、僅かな臨時授業に出席するだけで、全校生徒の顔と名前をくっつけてよく記憶している点では、毎日授業に出る職員の誰もが及ばない程であった。

間崎はミス・ケートの信念を教育的に正しいものと思った。個性助長とか個別指導とかいう概念は教育界の流行語となっていたが、それをほんとに生かして行くためには百の議論よりも一の信念を必要とする。ミス・ケートにはそれがあった。もちろん、学校は多数を教育する機関である以上、個性尊重の立場に溺れて、生々しい性格の林の中に踏み迷い、全体としての正しい方向を見失うような結果に対しては警戒をしなければならないが、多すぎる生徒と少な過ぎる職員との比率は、実際的にはそんな危険があり得ないことを明らかに示していた。

間崎は自分の勤めに喜びを感じた。赴任当初は、年頃の女生徒に接するのが面はゆくてならなかったが、二年余も経った今日では、自分の知識や感情を適度にパラフレーズして、繊細な感度をもつ少女達の精神を明るい淡泊な色調に塗り上げていくことに静かな愉悦を感ずるほどのゆとりを持つことが出来た。

間崎は自分が若い男性である故に無条件に生徒達から好意を寄せられていることを知っていたが、それを濫用し、それに溺れることさえ慎めば、与えられたハンデキャップは女生徒を指導する上に得難い天与の一資格である事を純粋に信じていた。素朴的な性の牽引は父と娘の関係においてさえ白極光のように美しい。

溺れることと共に、人生を華やかな曲線で執縛すること の牽引力を反動的に冷却させる事をも深く恥じよ。

六月のある金曜日の午後、間崎は、「悪魔の室」と諧謔的に呼ばれている喫煙室に籠って、五年級の作文に朱筆を加えていた。それは天井ばかりがむやみに高い一間半に二間の穴蔵を思わせるような室で、中央に古びた長テーブル、それを囲む四五脚の椅子のほかには花も額もない殺風景な場所だった。

南向きの窓からさしこむ陽はテーブルの面を半分だけ明るく照していた。使用中は、煙草の煙が廊下に流れ出るのを防ぐためにドアの開放を厳禁してあるので、たゞでさえ窮屈な室の中は蒸されるような暑さだった。生徒達は正午から郊外散歩に出かけて留守だった。校舎の中は森閑とひそまって、裏の松林で鳴く油蝉が、濁った余韻の無い響を乾燥した空中にベルトのように吐き出していた。

間崎は、じっとり汗ばんでやけに煙草を吸いながら、一枚一枚、味気なく仕事を片づけていった。同一課題の未熟な文章を百五十名分も調べ上げなければならないのだから、一般に作文という学科は教師の側にはあまり歓迎されないものになっているが、間崎の経験によると、この学科は、教授者の課題の選び方及び課題解説の成功不成功によってその時々の成績の水準が著しく変動し、よく出来た場合には他の学科にみられない発剌とした面白味を感得することが出来る。なんと言うか、みず〳〵しい感情思索の万華鏡を覗くといったような楽しい満ち足りた気持なのだ。その反対もひどいが――。

間崎は何回目かの苦しい欠伸を洩らして、とう〳〵ペンを捨てた。そして、疲れた涙の目を、たった一輪だけ窓の高さにヒョロ長く伸びた真紅の牡丹に注いで、自分の肉体と精神を漠然と憎悪する感情の中に沈んだ。甲の評点を与えられる文章が今まで読んだ分には一編も出てこない。課題は「雨が降る日の文章」というのだった。ジト〳〵降りつゞく長雨は私達の魂にカビを生ぜしめる、夏の夕立は心の沐浴だ。朝の雨、夜の雨、子供の目から溢れ出る涙の雨、読んで雨の音を遠くなつかしく耳の底に蘇らせる文章、雨をインクにして書いた文章……と丁寧にこちらの狙い所を説明して置いたのに、みんなほんとの雨降りの日を書い

てしまった。妹とケンカした子、母に手伝ってお萩をこしらえた子、主婦の友を読んだ子、窓に凭れて賛美歌二百十六番を唄った子――。責はこちらにもあるが、要するに主題を把握する力がなかったのだ。辛抱して五六編も読みつゞけて行くと、そのどれかに必ずあの「雨が降ります雨が降る、あそびに行きたし傘は無し……」という白秋の童謡が引用されてあるのには苦笑するほかない。五年生じゃないか。

閒崎は仕事をきり上げてピアノを弾きに行こうと思ったが、疲れた時の愚図々々した気持にひきずられて、結局またペンを拾い上げた。今度は沢山の中からふだんに立派な文章を書く生徒のだけを選んで読むことにした。いつもはこんな仕事のやり方を自分に禁じてあるのだが――。結局は同じことだった。誇張した形容、浮き上がった叙述、こうなると巧詐は拙誠に如かずだ。閒崎は最後に、その名を思い出すと共に棘のようなものを胸に感ずる一人の生徒の文章を読んで、骨が折れるこの仕事をお了いにしようと考えた。五年B組、江波恵子。

「雨が降る日の文章――私にだけ書けそうな気のする文題だ。考えることも読み返す事も要らない。私は黙って私の心にフツ〳〵浮き上がってくる水泡のようなものを紙の上に書き現わしさえすればいゝ。私がこんな文章を書く努めざるチャンピオンであることは私の幸か不幸かは誰も知らないし、どうでもいゝことだ。

私には父がない。私がこの学校に差出した戸籍謄本にはハツ私生児江波恵子と記してある。家事の徳永先生にいつか「私生児って何ですか」とお尋ねしたら、暫く考えられて「神様の祝福を受けずにこの世に生まれ出た子供の事です」と大変むずかしい大変簡単な御答をなされた。徳永先生は私が祝福に恵まれない身分であることを御存知なかったのかも知れない。もし知って居られたらミス・ケートがなされるように人差指で私の顔のまん中をゆびさして、「それは貴方のような方です」と答えられたにちがいない。そうすれば私生児って何の事だか私にもハッキリ納得出来たのではないかしら。

キリストには父がない。マリヤは聖霊に感じておはらみになった。けれども私の母は……。母は若い時から沢山の男のお友達にたよって一家の生計を支えて来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

た。私の父と呼ばれる筈の人もその御友達の一人にちがいない。私の生命が、私の父である人が私の母を侮辱することによってこの世に送り出されたものであるとしても、私は神様を父にもつよりは人間の父をもつ事を欲する。罪なき者石にてこの女をうて。私ほど母を愛し私ほど母を憎む者はない。母はそのことを知っている。母は今も美しい。けれども年をとって身体も顔も肥って来た。愛か憎か、私がもつような生々しい感情の鞭に打たれなければ、母はもうどうして生きていけばいゝのかわからないほどに弱くなっている。

「お母様は幸福だった事があるの」

「わからない、何が幸福で何が不幸なのかお母様には考える力がなくなったの、お母様はお前が傍にいてくれなければこのまゝぼうとして気違いになるんじゃないかと思うわ。朝から晩まで誰にもわからない歌をうたっているような温順しい気違いにね。……そしたらお前はどうなるだろうね」

お酒を飲んで居た母はすぐに興奮して泣き出した。そして一年に一ペン遊びにくる外国汽船のキャプテンからもらった古い葡萄酒をもち出して私に飲ませてくれた。私がお酒のうま味をほんとに知ってることを母は気がつかないのだ。

「お母様がそんなになったら——私だってお母様みたいに独立で働いてお母様を大切に養って上げるわ。お母様がお祖父様にそうして上げたように……」

私はその言葉の反応を痛いような気持で母の顔から盗みとろうとした。あゝ、だけど、母はほんとに弱りきっている。

「そうねえ、お前はお母様思いだから、私が唄きちがいになってもきっと親切に私の面倒みてくれるだろう。おつくりをすればお前だって十人並の美人だし結構一人で立って行けるよ。女が独立で働くのをかれこれ悪く言うのは世間の奥様達のひがみだと思うよ。ねえ、だけどお前は私みたいに肥らないように気をつけたがいゝ。梯子の上り下りが苦しいし、一寸の物事に驚いて胸がドキン〳〵するからね。田村さんの奥様は毎朝冷水摩擦と体操をなさるんだとさ」

それが母の答えだった。私はまだ〳〵夢みる女に過ぎないらしい。それから、母も私もだんまりでお酒を飲んだ。暗い海から吹いてくる潮風が濡れタオルのよ

うに顔の火照りを冷やしてくれた。一匹の黄色い蛾が黒いテーブルの面にじっとへばりついていた。母も私も気にかゝって、見まいとするほどその不気味な生物に視線をひきつけられた。まだ見ぬ父のことが錐でつかれるように苦しく考えられてならない。

「お母様、女の幸福って男の方からで無いといたゞくことが出来ないものなの。女一人だけの幸福って世の中にはないものかしら、……ほんとの事を教えてね」

「お前は時々恐ろしい大人になるのね。学問したお陰だよ、きっと。お母様にはお前のたずねることがわからないの。世間には私ほど男の御友達を沢山もった人もないだろうし、また私ほどいつも一人ぼっちの女だった人もないだろうよ。そのくせ何が幸福で何が不幸だかをちっとも知らずに暮してしまった私なの。ずっと昔に、思い出せないの、夢だったかも知れないんだよ、お母様にも幸福らしいものが近づいて来た事があったんだけど、何だかその背中合せに血を流すような恐ろしいものが隠れていそうな気がして、憶病なお母様は尻込みしてしまったの、後になってからも悔む心なんか起らなかった。たゞもうあゝ恐ろしかった、よかったと思っただけなの。私はきっとその頃から肥り出したに相違ない。

お前の学校の先生が仰言るようにもし天国というものがあって、そこで神様が「お前は生きていた時に何をしていた女だ」とたずねられたら「私は沢山の男の御友達に親切にして上げました。私は誰をも欺きませんでした。一人のために一人をおとし入れるような罪深い行いは致しませんでした。出来ない約束はどなたにもした事がございません。私はみな様に公平に親切をつくしました。そうすることが私の生まれつきに協っていたのでございます。だからどなたも私のために争ったり私のために不幸に陥った方はございません」そう言って答えようと思うの。その通りなんだからね。だけどたった一つ神様に叱られるんじゃないかと思うことがあるの。それはね、時々一人ぼっちで御室にいると訳もなしに泣き出してしまうことがあるのよ。何故泣くんだか、泣く訳なんか少しも無いのに涙がとめどなしに溢れて来て、しまいには声をたてて泣き出さずにいられなくなるの、身体がこんなに慄えてね。どうしようも無い。だけど理由も無しに泣くなん

てきっといけない事だと思うわ。ねえ、お前の考えはどう？　なんだかお母様には、お母様が生まれない前にお母様が大人になってから泣かずにいられなくなるような原因がつくられておったような気がするの。そんな事なら誰にもわかりゃしない。ねえ、お母様はいけない女？」

「知らない。……お母様好きよ」

それが母の姿だった。感覚と理性を白濁した血の流れの中に喪失してしまった原始の女。哀れな母。憎い母。私は女学校の二年生になるまで母に抱かれて寝た。母の温い手が私のお尻を撫でまわした。母が唇を嚙んで泣くのも眠ったふりで知っていた。私の知らない理由で母が泣かなければならないという事がどんなに口惜しく悲しかったかを私は今も忘れない。私の母の悲しみの彼方にぼんやり「男」を考えた。今も変らない。けれ共また母と抱き合っていろ〳〵な御話をするのはこの上ない私達だけの楽しみでもあった。ある夜の寝物語に、私は母から女の身体の秘密についてきかされた。眠れなかった。涙が出た。けれ共翌朝までには私は女に生まれたことに深い意地悪な喜びを感じていた。私はこの喜びを誰にも気どられまいと自分に誓った。私がそうした女であることをハッキリ自覚した時、女に生まれたことの喜びが一層深刻なものになった……

「お前の指、すっかりもう一人前の女だね。お母様の指輪そっくりお前に上げよう。きっとよくうつるよ。……お母様は自分が嫌いじゃない。ないけどお前はお母様とちがっている方がいゝ。私達がこんなに仲好しでおられるのも、私達の気立がひどくちがっているからだと思うの。もしお前がお母様に似てくればお母様はもう要らないお母様になる訳だから、お室をきれいに飾って、御化粧もして、静かに死んでいくわ、ヴェロナールのんで。お前止めやしないね。お前の腕の中に抱いて……」

「えゝ、止めやしない。そんな日、だけどくるかしら？　来ても来なくても私達後悔なんかしないと思うけど。……お母様」

「はい」

「好きなの」

「お前お母様の姉さんみたいだね、自分でそんな気が

しない」
「するわ」
うつろに答えた。母は私の指を幾度も唇に当てた。
母にたった一ぺん訪れた幸福——それが私の父だった、なんて考える権利は私に無い。そんな理想主義は三文小説のハッピーエンドにしか向かない。世間の物事はその逆をいく。私の暗い生甲斐もそこに見出されるのだ。私は男を知りたい。その男を通して私の父を感じたい。父の肌を、父の血の匂いを、父の口臭を、父の欲情を——そうすれば私は神の祝福に恵まれない一人の私生児が何故この世に生まれ出たかを正しく知ることが出来るだろう。
母はテーブルにうち伏してうたゝ寝している。慢性疲労でこの頃は他愛なく眠る。私は窓縁に椅子をよせてひたすらに暗い夜の海を眺めた。海鳴をきいた。あの音の中に一切の秘密がかくされていそうな気がする。父、現われ出でよ！
結論に来た。気どりやの私は、真理探求に血を流す一使徒としての私を考える。私が処女でなくなる黒い一線がひかれる日は案外近いのかも知れない。私の名はハツ私生児江波恵子！
先生、私のわがまゝなデッサンです。少しはずかしいんですけど、でも書きたかったものですから」
原稿紙五枚にワクを無視した達筆な走り書で認めてあった。間崎は烈しい衝動に打たれた。彼は彼だけに示されたかくも生々しい心の記憶を、女はもちろん男の友人からさえ与えられたことがなかった。お下げ髪、水兵服——そのポケットにチョコレートをしのばせた小娘の中にこんな生活があろうとは！　間崎は二度繰り返して読んでから、刺激された感情の方向に彼の「評」を走り書きした。
「私が要求したものは雨が降る日の文章だったのに、貴女は嵐の日を書き上げた。それは既に書かれてしまったのだ。私は私が教師であるだけの理由で、かくも苦悩に満たされた懺悔を私の生徒に強いる権利があろうとは思わない。いや、これは私の外交辞令だ。ありのまゝに言うと貴女は豚に真珠を与えた事になろう。私の役目は生徒という概念を指導することにあって個個の魂には関りが無い。結局無い。私は白い手の錆物師だ。型つくりだ。それ以外のものであってはならな

い。この薄弱な大儒主義*は私もまた若いという理由でともかくも許容されなければならぬ。でないと私は貴女や彼女や彼女ダッシュの息づまるような心の花園の匂いの中に窒息滅亡を余儀なくせしめられるであろうから。それは私と貴女と、私と彼女との情死を意味する。私達はミス・ケートの心臓を擁護するためにも当分憶病者の名に甘んじようではないか。私は多くを言いすぎた。『吠ゆる犬は強からず』

以下二三の評を書く。江波恵子は自分を強いと信じている少女だ。彼女の目は嘗て多くの封建婦人が犯されていたつゝましやかな色盲症を患っている。それは、微細な陰影を捕えるには敏感だが肝心の光は尽く逸してしまう哀れな不具の網膜だ。現実とは自己の対立的存在では無い。自己の積極的意力が時間と空間に働きかけた場合にのみ我々の現実は誕生するものであり、江波がみたものは遠い昔に死滅した月世界の観念的な現実に過ぎぬ。それが如何に美しかろうと、その美は結局博物館に保管さるべきものなのだ。

江波の第二の誤謬は自分の幸不幸をこの冷却した客観世界に依拠せしめている事にある。それは古風な運命論であり、君はその中で自らを瀕死の白鳥に譬えて悲哀の酒に酔い痴れようとしている。与えられる号令は回れ右！　だ。そして君は一兵卒の四角い素朴な意識をもって君の人生を踏みなおさなければならぬ。妄評多謝」

間崎は一気にその評文を書いてしまった後、寂しい濁った気持にさせられた。人中で調子に乗って喋り過ぎたり、嘘を吐いたりした時に感ずる渋い舌触りな気持。多分彼は評文の中に空疎な美辞麗句を織り込んだものに相違ない。だが、いつの場合でも、そんな風の虚偽は、その時偶然に語られたものではなく、彼の心にそれを醸す不純な滓渣が沈澱している事実を裏書きするものだから、自分の未熟を鞭つと共にその滓渣を根絶やしする意味で、一度口外した言葉は成可く引っ込めないことに決めていた。今度も彼は衒気に満ちた彼の即興的な批評を一字も訂正しまいと意固地に決心した。

――間崎は赴任後間もなく江波恵子の名を知った。職員室の話題に上る江波は、ひどい我儘者で、よく学用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもってくる、寄宿

生であるにもかゝわらず遅刻早引が多い、教師に理屈を言う、そのくせ頭は素晴らしくいゝ、といった風な、教師の側からは最も扱い難い生徒の一人であった。間崎はそうした噂を聞き、また時々訓育係の先生に呼び出されて御叱言を食っている、大柄な、美貌の本人を見知ってからも、特別な関心をもつ事はなかったが、ふとした機会で江波との間に個人的な交渉が生じて以来、疲れた時、寂しいとき、江波の姿が雲のように心をかげらすのに気づいて顔を赤くする事が屢々あった。恋愛だとは思わない。絵でも文学でも人間でも、退廃的なものに心を引かれる自分の傾向を間崎は平素から極力警戒していたし、江波に対する関心も、他の生徒にみられない成熟した一つの性格に対する興味にすぎないものだと思った。

七月半ばのある日、彼は時間が空いていたので、雑誌をもって裏山へ寝転びに行った。熊笹の間の小道を通っていつもの丘に上り、一本松の下の窪地に腰を下ろして、眩しく光る海を眺め下ろしていると、ふと間近かで口笛の音が聞えた。ふり向くと彼から三間と離れてない別の窪地に江波恵子が、両手を頭の下にあて、あけひろげな形で伸々と寝ころんでいた。胸に赤い表紙の本をのせ、目をつぶって口笛を吹いている。間崎は驚くと共に、江波の地面に任せきったような姿態に反射的な恥ずかしさを覚えた。彼は近づいて声をかけた。

「どうしたんだ、江波さん」

「とう〳〵みつかったわ、足音が聞えた時先生かも知れないと思いましたの」

江波は起き上がって彼の顔を見上げ、悪戯を企てた子供のように面白そうに笑った。こうして見るとほんの無邪気な少女の顔でしか無い。

「頭が痛いからこの時間だけ先生に休ませていたゞきましたの」

「君は我儘が通っていゝんだね。何の本だ……」

間崎はぶっきら棒に言って江波の傍に腰を下ろした。空も海も青く晴れ渡って誰とでも仲よく出来るすがすがしい気持だった。本はフランスの訳詩集だった。

「先生お上りになる……」

ポケットから銀紙に包んだチョコレートをつかみ出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong